

日本地域看護学会委員会報告

2022年度日本地域看護学会研究セミナー

質的記述的研究とは何ぞや

——質的研究に関する10のキークエスチョンを基軸に学ぶ——

2021～2022年度研究活動推進委員会

日本地域看護学会誌, 27(1): 49-53, 2024

I. はじめに

地域看護学は人々の生活の質の向上とそれを支える健康で安全な地域社会の構築に寄与することを探求する学問である(地域看護学の再定義2019年, https://www.jachn.net/other/ckango_saiteigi.html). 多様な場で生活するさまざまな健康レベルにある人々の生活の質を保障することを目的とし、暮らしを継続的・包括的に捉え、コミュニティと協働しながら効果的な看護を探究する実践科学である。私たちが看護学として最も大切にしたいことは、当事者の経験であり、当事者になにが起こっているのか、その事象を起点に地域看護のナレッジやスキルを開発する必要がある。

看護専門職は当事者に寄り添いながら、変化する地域社会に生きる人々の経験や暮らし方から学び続けている。その学びは良質な質的研究を生み、実践を変える力をもっている。しかしながら、近年、質的研究が広く用いられるようになり、正しい行儀作法があるかのように方法論how toに関心が向きがちである。そこで2022年度日本地域看護学会研究セミナーは、質的研究に関する素朴な疑問や釈然としない事柄を掘り下げ、看護学の発展に関わる本質的な課題について考える機会として企画し、開催した。その貴重な内容を報告する。

II. 研究セミナーの概要

1. 講師

研究セミナーのテーマは、「質的記述的研究とは何ぞや——質的研究に関する10のキークエスチョンを基軸

に学ぶ——」とし、宮城大学人間・健康学系看護学群教授の谷津裕子氏にご講演いただいた。

2. 日時・方法

2023年3月4日(土) 10:00～12:00にライブ配信によるオンラインセミナーを開催した。ライブ配信を収録し、2023年3月7日(火)～3月21日(火祝)の期間、オンデマンド配信を行った。

3. 参加者数

研究セミナーの参加者数は338人であった。参加者の内訳は、学会員226人、非会員40人、学生(学部・大学院)72人であった。

III. 講演「質的記述的研究とは何ぞや——質的研究に関する10のキークエスチョンを基軸に学ぶ——」

講師：谷津 裕子氏

(宮城大学人間・健康学系看護学群教授)

1. 質的研究方法の特徴

質的研究方法の本質的特徴とは、重要な“少ない”数のケースにみられる多くの要素に全体論的に焦点を当て、現象の本質を理解するプロセスである。量的研究における観察対象となる“たくさんの”標本にみられる、ケースの諸側面に広範囲に焦点を当てながら現象の本質を理解するプロセスとは対照的であるといえる。質的研究というのは少ないというところに価値をおいている。

まず、質的研究方法を特徴づける性質は多くあるが、特に大事なポイントを5つ挙げる。1つ目は「データが言葉で表される」ということである。データが数ではなく、言葉というものに落とし込まれ、それをデータとして扱って最終的に言葉でまとめていくという、すべてが言葉であるところが質的研究の特徴である。2つ目は、「データに基づいて概念を導き出す」ということである。量的研究の場合、たとえばアンケート調査でなにを聞かが最初にわかっていないとアンケート項目は作成できない。大体の概念、枠組みを先に考え、それに合った質問項目をつくる。ところが、質的研究はそれとはまったく逆の発想であり、まず、データがあってそこから概念を構築していくという帰納法といわれるボトムアップの方法であるというのが特徴である。量的研究のように先に概念を決めてそれに合ったデータをとっていくという演繹的な発想とはかなり違うため、初めて質的研究に取り組む研究者からすると、「なにが出てくるかわからない」という非常に不安な気持ちになることもある。闇夜の手探りでデータをていねいに分析していくことによって、最終的に初めに思いつかなかったような現象が概念として浮かび上がるという発見的な概念をとるのが特徴である。3点目は、「データ収集とデータ分析が同時に行われる」という特徴である。対象者から得られたデータをなるべく早く分析にかけ、そこで見いだされた仮説をもとに「違う状況にある人はどんなふうにか考えるのだろうか、同じような考えなのかそれとも違う考えが出てくるのか」と分析した内容をもとに次のデータ収集をする。データ収集と分析が同時に行われるという特徴が非常におもしろい点である。4点目は、「研究者自身が研究の道具」ということである。量的研究の場合、だれがいつどのように測定しても同じような結果が得られなければそのデータの信頼性が失われる。質的研究の場合、この測定用具や尺度がすべて研究者である。研究者自身の主観を客観的に表現できることがたいへん重要である。これは再帰性といわれ、自分自身の信頼性、妥当性という自分自身がどういう尺度、研究道具なのかを他者にわかるように表現することが重要である。国際的な学会や論文においては、この再帰性について非常に厳しく問われる。5番目は「ケース志向で問いを明らかにする」ということである。「ケース志向で問いを明らかにする」ということには、1) 合目的的な標本抽出法と、2) ケースに方向づけられた分析がある。

1) 合目的的な標本抽出法については、質的研究にお

いて意図的に選択したケースの徹底的な理解が求められる。研究目的に対応する情報を豊かにもつ対象者を選ぶという合目的であることが大切である。量的研究において、母集団をできるだけ代表するような標本を選ぶこと（代表性の重視）とは対照的である。その合目的的な標本抽出法のタイプと手法は多くある。そのなかで特に看護研究で扱われることの多いタイプ4つを示す。

理論的サンプリングは、グラウンデッドセオリーアプローチで開発されたものであり、ある人の知識と経験が理論の生成を容易にすると考えられる参加者を募集する。目的に合う人を参加者に募集するという質の前提を共有し、追加の参加者を募集して新しい概念を検証また拡張するということを目的としている。データ収集とデータ分析を交互に行っていくという方法である。緻密にデータを検証しながら、また新しい概念を見つけ出ししていく。2つ目に基準サンプリングがある。これはいわゆる基準をつくってその特性に則した参加者だけを集めてくる、あるいはその特性に適さない人という基準をつくって参加者を募集するというものである。3つ目は多様性が最大になるサンプリングである。質的研究でも目的によっては多様性をみるということがある。たとえばアンケートを作成するときの項目や選択肢において先行研究からわかっていないときは、多様性が最大になるサンプリングを行う。4つ目は逸脱ケースのサンプリングである。ある研究目的を果たしたいときにあえてその目的とまったく違うケースであるネガティブケースを集めてくるタイプのものである。また、手法にはコンビニエンスサンプリングとスノーボールサンプリングがある。コンビニエンスサンプリングとは、研究参加者の条件に合った知人に依頼することである。研究目的に関する情報を豊かにもち、さらに言語化できる人にアクセスするという手法は、第1選択である。条件に合った人が自分の知り合いにいない場合、ある人を仲介してその人に条件に合う人を紹介してもらい、次々と紹介してもらいながら実施する方法をスノーボールサンプリングという。チェーンサンプリング、ネットワークサンプリングなどとも呼ばれる。

2) ケースに方向づけられた分析について述べておく。質的研究はケースの水平的に読んでいくことが重要あり、「これはどんなケースなのか、なにがこのケースをそのケースにさせているのか」といったように、出来事を成り立たせる要素と要素のつながりに着目することで質的研究の命である個別性の理解につながる。質的研究

を通して得られる結果は、 $n=1$ (1人の人) が経験する人生からの教訓を増やし、各ケースの固有性(ケースの多様性)を見いだすことに貢献するといえる。

2. 質的研究の方法論と方法

質的研究にはいくつかのアプローチがある。そのひとつである質的記述的研究は、自然主義に基づき、出来事を日常の言葉で表現するという記述の特徴がある。現象学的研究とは体験の意味や本質について、すでに明らかにされている所与の言葉による解釈や説明を超えて明らかにしたいという目的に適したアプローチである。次に、エスノグラフィという方法は、文化人類学を理論的基盤としているものであり、その集団がもつ価値や信念、そして実践が反映された現象を明らかにしたい場合に適している。グラウンデッドセオリーアプローチは、プロセスを含む社会的な問題について、特定領域に密着した「具体的理論」を生成したい場合に適している。質的記述的研究とそれ以外の研究にはかなりの違いがある。

3. 質的記述的研究とは

質的記述的研究とは、ある出来事についてその出来事を構成するその日常の言葉で包括的に要約する研究デザインである。質的記述的研究を行う研究者は、データの近くにおいて、語られた言葉、出来事の表面から離れないという特徴をもつ。事実やその事実に研究参加者が与える意味を正しく捉えて、明解でわかりやすく伝えることがポイントになる。この質的記述的研究において、ぜひ守らなければいけない2つのことがある。1つは記述的妥当性である。これは同じ出来事を観察した研究者や研究参加者が、まちがいないと認める出来事の正確な証言である。2つ目に解釈的妥当性であり、これは研究参加者がその出来事に与えた意味の正確な説明である。生データを記述することによってエビデンスが示せ、ニュアンスを伝えることができるので説得力が増すが、一方で生データだけを列挙することは避ける。

4. 質的研究におけるサンプリング計画

質的研究のサンプリングの対象は人ではなく、出来事や事例、経験である。研究参加者の数だけでなく、信頼できる情報を保証するインタビューや参加観察等の回数、出来事の数を検討することが大切である。質的研究の結果の妥当性とは、参加者の人数や面接回数だけでは判断できず、どのようにして、どのような情報を得たか

という「質」を考慮することが必要である。質的研究の適切なサンプルサイズとは、大きすぎることなくすべての質的研究の顕著な特質である深いケース志向の分析を可能にするものであり、同時にまた、小さすぎることなく、経験を新たにその本質まで理解する結果をもたらすようなサイズである。質的研究におけるサンプルは、出来事・事例・経験であって人そのものではない。

5. 質的研究で得られる結果の一般化可能性

質的研究論文の最終章(研究の限界と今後の課題)において、「本研究の結果は少数の研究参加者から得られたデータの分析結果であるため、この結果を一般化することはできない」という記述を目にすることがある。一般化には4つの分類があり、法則定立的一般化とは量的研究が得意とするものである。個性記述的一般化とは質的研究、そして自然主義的一般化と分析的一般化は、量的研究と質的研究の両方が得意とする。一般化をめぐる議論のもつれはこれら一般化を混同することによって生じている。そこで、法則定立的一般化(nomothetic generalization)について探ると、法則定立とは、できるだけ“たくさん”のデータを集めて結論を導こうとする試みであり、ケースに共通する変数に焦点を当て(変数指向)、繰り返しみられるテーマや転移可能な概念を探究することである。量的研究が得意とし、外的妥当性を高めるために確率標本抽出法を用いて母集団を代表する標本を選ぶ。一方、個性記述的一般化(idiographic generalization)は、1つのケースを調べて、法則定立的な研究方法では見逃しがちな情報を洗い出し、ケースの固有性を掘り下げることによってそのケースの本質を見いだすことである。1つのケースの包括的な深い理解に焦点を当てること(ケース指向)によって見いだされるタイプの一般化であり、質的研究が得意とする。また、研究目的に関する内容豊富なデータを集めるため、合目的サンプリングが行われる。

ここで、普遍と一般の差異について考えてみたい。普遍と一般の差異とは、まず普遍(universal)というものは多様性のなかの一致であり、個別からなる全体である。水平方向にこの個を理解することによって、この輪のなかに次々にparticularなるものを増やしていく。一方、一般(general)というものは、同質性のなかの一致であり、より包括的な上位概念で、垂直方向で理解するということを目指している。この似ているもの同士を集めてさらに似ているものを抽象化し、その似ているものから

最終的に全部に共通するものを見つけ同質性の理解へと向かう。「普遍」を見いだす方向性は個性記述的一般化を行っていくこと、「一般」を見いだす方向性は法則定立的一般化であると考え。また、質的研究のケース志向性とはその方法論の如何やサンプルサイズの違いにかかわらず、基本的にケースを変数に分解してみるのではなく、全体(1つのまとまり)として捉え、その本質を理解しようと努める点に特徴がある。

われわれ研究者は少数のケースから得られる質的研究の結果が、法則定立的一般化にはほとんど貢献もしないという当然の事柄を、「本研究の限界」として述べることや述べられることに慣れてしまっている。「質的研究の成果は一般化できない」という根拠のない言説の一端を担い、質的研究に対する誤解を作り上げているが、法則定立的一般化と個性記述的一般化は、お互い補完し合っていくことが大切であり、量的研究、質的研究の相互がもつ一般化を理解し極めていくということが重要である。真の“本研究の限界と課題”とは、個性記述的一般化からみた限界はどこにあったかを振り返ることであり、以後の研究に大いに役立つ。質的研究におけるケース志向のアプローチを徹底させる方向での省察が、質的研究論文にさらに言及されるべきである。

IV. 質疑応答

質問：サンプル数と一般化に関して補足の説明をしてほしい。

回答：サンプル数において、論文投稿や倫理審査時に執拗に質問されることが多々あり、その数値に根拠を出しにくい。質的研究とは人数ではなくケース志向で分析していくものであるため、それぞれの人がどれくらいのケースを語り出すのかは、インタビューを実施してみないとわからない。実施しケースを分析していくなかで、さらに必要だと思えば追加していくため「現時点で明確に伝えることは難しい」と主張している。

個性記述的一般化を理解するのは難しいが、最初は一部分しか知らなかったことが、段々と個性が集まることによって体験の輪が広がり、多様ななかの一致があるということが見いだされることである。これは1つの研究のなかでケースを増やしていくことによって達成できるかもしれないし、別の研究者が別のデザインで実施することによって見いだされるかもしれない。体験というところに関しての理解がさらに水平方向に広がってい

く、そのような理解をもってもらいたい。

質問：生データをていねいに記述することが重要と理解したが、論文投稿規定には文字数制限がある。どのように対応すればよいか教えてほしい。

回答：伝えるべきことは研究目的であり、その研究目的に合った方法論で一貫性をもって伝え、研究者がフォーカスを当てたいところをしっかりと描くとよい。サブカテゴリーなどを全部記述するのではなく、研究目的において重要な箇所のカテゴリーに特化して記述していく。表だけで表現できるならそのような工夫を取り入れるとよい。

質問：標本抽出の手法におけるスノーボールサンプリングについて、倫理審査で「研究協力者に負担が生じるため再考するように」というコメントをもらったことがある。このような審査者のコメントにどのように対応すればよいか。

回答：研究参加者と同じく研究協力者にも同じように断る権利があるということをしっかりと伝えるようにする。研究協力者が「断ります」と主張することさえも負担であるため、回答に期限を設け、期日が過ぎても返答がなければ「協力しない」との意思表示として受け取るという方法もある。なるべく研究協力者に負担をかけずに、かつ、協力の有無がわかるような手法を用いることが重要である。そして、断られても研究が進められるように、多くの協力者を考えておくことも大切である。

V. 研究セミナーを終えて

終了後のアンケートは133人(回答率39.3%)から回答が得られた。セミナーの内容は95.5%が「かなりよかった」「まあよかった」と回答し、講演時間は88.7%が「ちょうどよかった」と回答した。オンライン形式のセミナー開催は93.3%が「参加しやすい」と回答するとともに、オンデマンドによる視聴は63.9%であった。また、質的記述的研究について94.0%が「かなり理解できた」「まあ理解できた」と回答していた。

今回の研究セミナーでは質的記述的研究における研究計画の立案や分析、記述の方法、そして論文のあり方や視点について包括的に学びを深めることができた。質的研究は共通性を見いだすというイメージを抱いていたが、「少ないケースから現象の本質を理解する」とことの重要性を認識することができた。改めて、質的記述的研究の奥深さとおもしろさを感じる機会となり、今後の研

究・教育に生かすことのできる研究セミナーとなった。

谷津裕子先生には、ご多用のなかご講演いただきありがとうございました。たいへんわかりやすいご説明で、質的記述的研究についてさらに深く知りたいと思う機会になりました。今回のセミナーは学生(学部・大学院)の参加が72人と多く、研究の初心者にとっても、また、日ごろ質的記述的研究に取り組みながらもその手法に悩んでいる研究者にとっても貴重な機会となりました。講演内容に加え、質疑応答においても細やかなご教示をいただきましたことを心より感謝申し上げます。さらに、

本稿をまとめるにあたり講演内容の確認にもご対応いただき、誠にありがとうございました。

2022年度研究活動推進委員会

委員長：大森 純子(東北大学大学院)
副委員長：和泉 京子(武庫川女子大学)
委員：北岡 英子(湘南鎌倉医療大学)
平野美千代(北海道大学大学院)
松永 篤志(東北大学大学院)
持田 恵理(大泉町役場)
山下留理子(徳島大学大学院)